The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言葉を理解するとはどういうことか? : §1 導入
Author(s)	入江, 幸男
Citation	
Version Type	AM
URL	https://hdl.handle.net/11094/14255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

２０１０年度１学期　金曜３時限
学部「哲学講義」
大学院「存在論講義」

「言葉を理解するとはどういうことか？」

＜シラバス＞
授業の目的：哲学的意味論を紹介しつつ、「言葉を理解するとはどういうことか？」「言葉と世界はどう関係するのか？」「私と他者の関係はどのように位置づけられるのか？」という問題を考える。
講義内容：主として、真理条件意味論と主張可能性意味論、実在論と反実在論、全体論的意味論と分子論的意味論、などの論争を紹介し検討する。

授業計画：
１、フレーゲの意味論を簡単に紹介する。
２、デイヴィドソンの真理条件意味論について詳しく紹介し検討する。
３、真理条件意味論を批判しているダメットの主張可能性意味論を詳しく紹介し検討する。
４、できれば最後にブランダムのプラグマティックな意味論を紹介し検討する。

教科書：使わない。適宜、授業時にプリントを配付し、HPにupする。
参考文献：授業中に紹介します。
評価の方法：毎回の出席とミニレポート５０点、最終レポート５０点

第一回講義　２０１０年4月１６日
§１　導入

「言葉の意味は何か」この問を問う者は、すでにこの問を理解している。したがって問う者も答える者もすでに言葉の意味を理解している。しかし言葉の意味を理解することと、言葉の意味を理解するとはどういうことかを理解することは別の事柄である。
今日は導入のために、伝統的なないし常識的な意味論だと思われる心像説、概念説が抱えている問題点を説明して、次回からのフレーゲ以後の意味論の検討の前提としておきたい。

１　言語の意味の心像説
●語の意味は、ひとが語を理解するときに把握している心像である。
批判１：千角形と千一角形の心像は区別できない。
批判２：「三角形」を理解するときの三角形の心像は、直角三角形の心像でもないし、鋭角三角形の心像でもないし、鈍角三角形の心像でもないはずである。しかしそのような三角形の心像はありえない。
批判３：「しかし」や「そして」や「ゆえに」や「ない」や「である」を理解するときには、対応する心像がないようにおもわれる。

●文の意味は、ひとが文を理解するときに把握している心像である。

批判１：文の心像が、文を構成する語の心像から構成されるとすると、語の心像についての上の批判により、文の心像もまた成立しないことになる。たとえば、「１０００」と「１００１」の心像を区別できないので、次の二つの文の心像も区別できない。

「１０００は、１００１より大きな数である」

「１００１は、１０００より大きな数である」

批判２：「この見本は赤い」の心像は想像できても、「この見本は赤くない」の心像は想像できない。

２、言語の意味の概念説

●語の意味は、ひとが語を理解するときに把握している概念である。これは、語の意味の心像説への上記の批判１、２を回避できる。３も回避できるかもしれない。

批判１：「これは三角形である」と言えるかどうかの基準は、＜「これ」で指示される対象に、三角形の概念を適用できるかどうか＞である。しかし、これを決定するには、＜三角形の概念をある対象に適用できるかどうかの基準＞が必要である。しかしこの基準は、もはや三角形の概念ではありえない。(プラトンのイデア説に対する批判である「第三の人間」論と類似している。)

●文の意味は、ひとが文を理解するときに把握している概念的なもの（命題）である。これは、文の意味の心像説への上記の批判１、２を回避できる。

批判１：文の意味は、文を構成する語の概念から構成されるとすると、語の概念についての上記の批判１により、文の概念的なもの（命題）もまた成立しないことになる。たとえば「これは三角形である」の命題が正しい場合と正しくない場合の区別がつかなくなる。

３、心像説と概念説への共通の批判

批判１：語の意味も文の意味も、公共的である、つまり多くの人々に共有されている（あるいは、少なくとも各人がそう考えている)。しかし、心像や概念が各人の心の中で意識されているものだとすると、私の「タワー」の心像（ないし概念）と、他の人の「タワー」の心像（ないし概念）は別のものである。そうすると語や文の意味が、各人によって数的に異なることになる。それでは語の意味を共有しているとはいえない。

改良１：「タワー」の意味が共有されるためには、各人の「タワー」の心像や概念が共通でなければならない。その共通な要素を意味と考えることができる。

批判２：この語「タワー」の意味が理解されているためには、各人のそれについて概念が共通要素を持つことだけでなく、共通要素が共通要素として意識されていなければならない。しかし各人が意識したこの共通要素は、各人の意識の中にある。そうすると、それはまたしても各人によって数的に異なることになる。しかし、さらに共通要素の共通要素を語の意味と考えたとしても、同じ

問題がふたたび生じるだろう。

解決策１：このような共通要素の取り出しを繰り返しても問題は解決しないので、最初の概念説に戻ろう。各人が心に抱いている語「タワー」の意味（概念）が同一内容であることは、コミュニケーションがうまく行っていることによって保証されている。そしてコミュニケーションがうまく行っていることは、さらにコミュニケーションがうまく行っていることによって保証されている。もちろん、この保証は絶対的なものではなく、いつか破綻してしまうかもしれない。つまり互いに異なる意味で「タワー」を理解していたことがわかるかもしれない。我々は意味論的に孤独であって、語や文の意味は公共的であると考えてはいるが、それは常に各人の想定にとどまる。（これは意味論的独我論、認識論的独我論、存在論的複数自我論、などと呼べる思想である。これは常識的な立場であるが、厳密に考えた場合ウィトゲンシュタインの「私的言語批判」と両立しないと思われる。）

解決策２：語「タワー」の概念を共有するためには、数的に一つの概念を我々が共有する必要がある。つまり我々が複数の同一内容の概念ではなくて、数的に一つの概念を考えている必要がある。つまり「我々」は一つの考えを考えている。（これは荒唐無稽であるかもしれないが、しかし日常的には無反省にこのように考えているように思われる。これに対して、考えるのは我々の脳であり、脳は人間の数だけ複数存在するという批判がありうる。しかし、最近のミラーニューロンの研究は、我々の脳はミラーニューロンによって連動して働いており、我々の孤立した脳が考えているのではく、ミラーニューロンによって連動した多数の脳が考えているという可能性を示唆している。）
（解決策１と２については、拙論「知を共有するとはどういうことか」（「メタヒュシカ」第 37 号、２００６年、２００６年１学期講義ノート、２００８年一学期講義ノートの参照を乞う。）

解決策３：もう一つの解決策は、語の意味の指示対象説である。

解決策１と２は両立しないが、解決策１と３、２と３は両立するかもしれない。これを考えてゆきたいが、来週はまず、フレーゲをもとに指示対象説を紹介し検討する。

＜ミニレポート課題＞